

群馬 教 育	G05 - 07
	平27.257集
	図画工作

発想を広げ自分なりの表現を 追求しようとする児童の育成

—表現の基となる
「図工の種集めの活動」を通して—

特別研修員 佐藤 潤子

I 研究テーマ設定の理由

「はばたく群馬の指導プラン」には、群馬県の図画工作科の課題の一つとしてとして「材料の特徴を生かして発想すること」とあり、造形活動で用いる材料や場所などから様々な特徴を捉え、想像力を働かせて発想する能力を高める指導の充実が求められている。

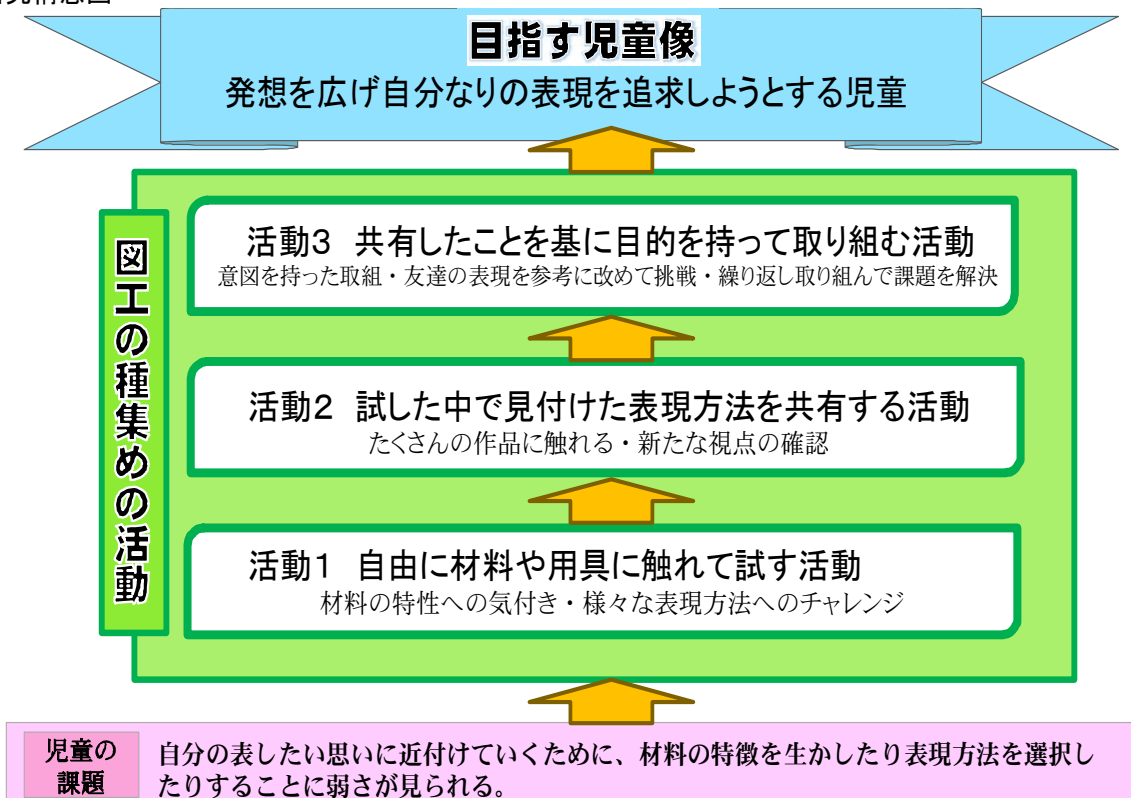
本学級には、参考作品や材料、用具、表現方法との出会いによって表したい思いを持てる児童が多い。しかし、自分の表したい思いに近付けていくために、材料の特徴を生かしたり表現方法を選択したりすることに弱さが見られる。また、少数ではあるが、表したい思いがなかなか持てず、何をしたら良いか分からなくなってしまう児童もいる。

このような児童の実態から、まず、発想や構想の基となるものを多様に持てるようにすることが必要であると考え。そのためには、実際に材料や用具に触れる、試す、遊ぶなどの活動を行い、活動の中で見つけた表し方や使い方を共有していくことが有効であると考え。児童は、材料や用具と関わり合いながら見つけた表し方を基にして、自分の思いに近付けるための表現を追求していくことができるであろう。

以上のような考えから、子どもたちが発想を広げ、試行錯誤しながら自分の表したいイメージを具現化していくことを重視し、上記のとおりテーマ設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

<図工の種集めの活動>

自分の思いをふくらませ、発想や構想の基となるものを多様に持てるようにする「図工の種集めの活動」として、次の三つの構成で活動を設定する。

活動1 自由に材料や用具に触れて試す活動

活動2 試した中で見付けた表現方法を共有する活動

活動3 共有したことを基に目的を持って取り組む活動

上述の「図工の種集めの活動」を以下のとおり具体化し、実践を試みた。

【実践1】

テラコッタ粘土を使い、未来に残したい自分だけの土器をつくるという題材において、本製作に入る前に、「図工の種集めの活動」を以下のとおり具体化し存分に飾りや模様づくりを試行させた。

活動1 自由に材料や用具に触れて油粘土に模様づくりを試す活動

活動2 試した中で見付けた表現方法を共有し、模様づくりの視点を捉える活動

活動3 確認した視点を基に目的を持って模様づくりに取り組む活動

実践1においては、活動2において、視点を絞ることによって新たな目的を持って活動に取り組む児童が多かった。しかし、視点を意識せずに活動に取り組む児童も見られた。全体で共有した視点が児童の課題意識とずれたものであったためと考えられる。

そこで、実践2では、活動2で表現方法を共有する際に、活動3での児童の意識を想定し、より適切な活動となるよう改善することにした。

【実践2】

本題材は、色を付けたペットボトルや透明容器に光を当てることで投影される形や色の特徴や変化を基に、色や材料の組合せ方や並べ方を工夫して表す「造形遊び」である。児童は、材料や場と関わりながら表現することになるが、本題材では「図工の種集めの活動」として材料を用いて光の効果を試すことに絞ることとした。本題材は造形遊びであり、色や材料の組合せによって表現方法に広がりを持たせることで表現を発展させていきたい。そこで、以下の通り活動を多様な表現方法を見付ける活動として設定した。

活動1 自由に材料に触れて光の効果を試す活動

活動2 試して見付けた表現方法を共有し、透過性を生かした様々な表現方法を見付ける活動

活動3 共有したことを基に目的を持って光を映し出す活動

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 活動1で自由に材料に触れる時間を設定することは、材料の特徴や表現方法を見付けることに有効であることが明らかとなった。
- 活動2の内容によって、活動3で何を意識して活動するかが以下のように変わることが分かった。
 - ・活動2で視点を明確にすると、活動3では表現方法に深まりが出る。
 - ・活動2で多様な作品に触れると、活動3では表現方法に広がりが出る。

2 課題

- 活動2「試した中で見付けた表現方法を共有する時間」において、「視点を明確にし深めること」と「たくさんの作品に触れて広げること」のどちらを意図して活動2を展開すると良いか適切に使い分けられるように、どのような題材がそれぞれに適しているか明確にしていく必要がある。
- 友達の作品からよさやおもしろさを見付ける場合は、一つの作品を選ぶのではなく、できるだけたくさんの作品から見付けることが、新たな視点や広がりを生むことに必要であった。有効な交流の仕方を明らかにしていくことが新たな課題である。

<授業実践>

実践 1

1 題材名 「未来に残す わたしの土器」(第6学年・1学期)

2 本単元(題材)及び本時について

本題材は、社会科で学習した縄文土器を参考に、テラコッタ粘土を使い、未来に残したい自分だけの土器をつくるというものである。児童は、テラコッタ粘土を焼成して作品をつくり上げる経験を通し、新たな材料体験をすることができる。また、参考作品の縄文土器を鑑賞し、作者が土器に込めた思いを自由に想像し話し合うことで、自分が土器に込めたい思いを見いだしていく。そして、物を入れるという用途や置いた時の安定性から土器の形を構想していく。次に、粘土べら、ひもなどを使って粘土を加工したり、縄や枝、ペットボトルキャップなどで模様を付けて装飾したりして作品をつくり進めていく。本題材は、児童が自分の思いをふくらませ、表現方法を選択しながらつくり上げていくことをねらいとしている。

テラコッタ粘土は乾燥とともに固くなり、加工できなくなるため、本製作に入る前に「図工の種集めの活動」によって、存分に飾りや模様づくりを試行させることが大切である。そこで本製作に入る前の本時において「図工の種集めの活動」を次のように具体化した。

活動1 自由に材料や用具に触れて油粘土に模様づくりを試す活動

活動2 試した中で見付けた表現方法を共有し、模様づくりの視点を捉える活動

活動3 確認した視点を基に目的を持って模様づくりに取り組む活動

3 授業の実際

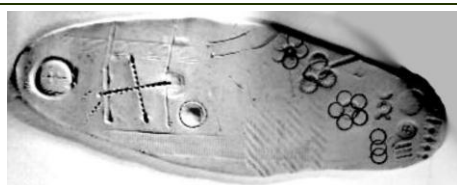
前時である第一時では、縄文土器を鑑賞し、気付いたことやおもしろいと思ったことを話し合い、自分がどのような形の土器にしたいか考えた。また、切り糸で粘土の端を切り成形する方法を試し、自分のつくりたい土器の形の発想・構想をふくらませた。

本時は、土器に付けたい模様について試しの活動を行い、発想・構想をふくらませることをめあてとした。

めあて 土器の模様の付け方を試して考えよう

(1)活動1 自由に材料や用具に触れて油粘土に模様づくりを試す活動

どの道具を使うとどのような模様が現れるか試す様子が見られた。この材料はどのように使ったら良いのか友達の活動を覗いたり、道具を次々と試したりする児童が多かった。自分から材料に関わり、材料の特性を見付けていた。次々に模様づくりを試していたので、形を羅列したものが多かった(図1)。



ペットボトルのキャップで型押しした。隣に竹串で線を描き、フォークでひっかき線を引いた。



チェーンを押し付け模様を付けている。



縄を転がして模様を付けている。

図1 様々な材料を用い、形の羅列が特徴的な活動1の表現

(2)活動2 試した中で見付けた表現方法を共有し、模様づくりの視点を捉える活動

活動1で表した模様を基に「何を使ったのか」「どのように使ったのか」を発表するよう投げ掛けた。また、それらを「組み合わせる」「繰り返す」ということを意識して模様づくりをすると良いことを確認した(次頁図2)。

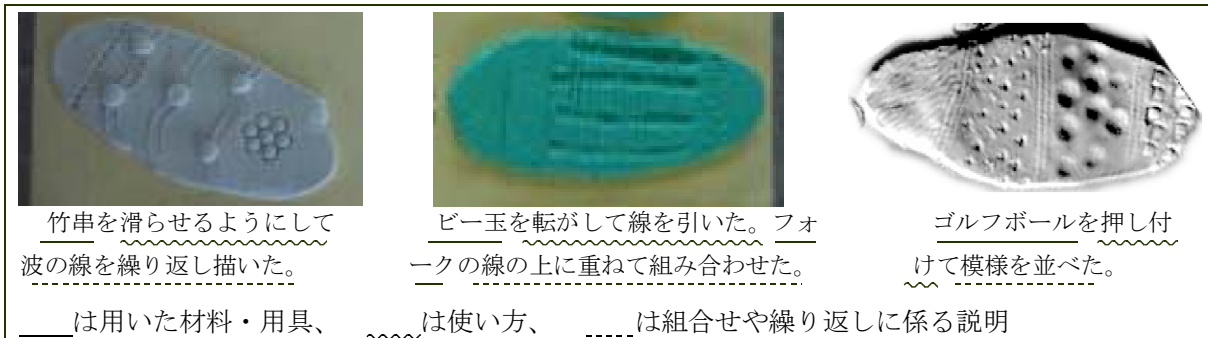


図2 活動2の様子 共有した表現と児童の発言の内容

(3) 活動3 確認した視点を基に目的を持って模様づくりに取り組む活動

「何をどのように使うか考える」「模様の組合せ、繰り返しを考える」という2点を視点として、再度模様づくりに取り組ませた。一人一人が黙々と活動に取り組み、意図を持って模様づくりに取り組んでいる様子が見られた。模様にはまとまりがあり、構成を考えたものが多かった(図3)。



図3 意図を持った模様づくりによる構成を考えた表現

完成作品を見ると活動3で表したように、二つの視点を意識した作品が多く見られた(図4)。



図4 試した模様の付け方を生かした土器

4 考察

- 活動1と活動3では、活動に質の差が見られた。活動1では材料に自分から関わり材料の特性をつかんだり様々な模様にチャレンジしたりしていた。一方、活動3では活動2で確認した視点を意識し、意図を持った取組が見られ、模様はまとまりのあるものへと変容した。
- 活動3で表された模様を分析したところ、確認した視点「何をどのように使うか考える」「模様の組合せ・繰り返しを考える」ということを意識して活動したと思われる児童は28名(90%)であった。これは、活動1と活動3の活動の間に設定した「活動2 試した中で見付けた表現方法を共有し、模様づくりの視点を捉える活動」において、活動1で表した模様を基に二つの視点を共有したことが有効に働いたものと思われる。
- 活動3で完成した作品を分析したところ、一つの道具や使い方にこだわった児童が3名(10%)いた。全体で共有した「何をどのように使うか考える」「模様の組合せ・繰り返しを考える」という視点が3名の児童には適切ではなかった。活動3における児童の意識を想定し、活動2はどのような内容が適切かを考えていくことが重要である。

実践2

1 題材名 「光のハーモニー」(造形遊び)(第6学年・2学期)

2 本単元(題材)及び本時について

本題材は、色を付けたペットボトルや透明容器に光を当てることで投影される形や色の特徴や変化を基に、色や材料の組合せ方や並べ方を工夫して表すものである。日光が当たり、多くの児童の目に触れる校庭の一角を場として活用することにした。まず、光にかざして色や形を映し出すには、どのような表現方法があるか、透明容器に色を塗ったりセロハンを貼り付けたりしてつくったものに光を当てながら試していく。そして、光が当たることによって生まれる形や色などから発想を広げたり、投影される形や色の効果を考えたりしながら構想を深めていく。出来上がった作品は、並べ方や組合せ方を工夫して光の当たる校庭に置いてみる。友達と協力しながら表現や鑑賞の活動を行うことができる造形活動である。

本題材では「図工の種集めの活動」として材料を用いて光の効果を試すことに絞り、以下のように構成した。

活動1 自由に材料に触れて光の効果を試す活動

活動2 試して見付けた表現方法を共有し、透過性を生かした様々な表現方法を見付ける活動

活動3 共有したことを基に目的を持って光を映し出す活動

3 授業の実際

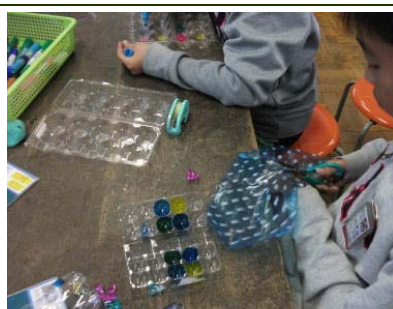
第1時の導入で、夕日やステンドグラスの写真を提示し、光を美しいと感じた経験を話し合い、光の効果と美しさに興味を持てるようにした。そして、自分たちも、透明容器に工夫をすることによって、美しい光が作り出せないかと提案した。

本時は、光を投影するためにプロジェクタとスクリーンを用意し、光が生み出す形や色の効果を試すことを通して、光を使った表現に興味を持ち、色や材料の組合せ方に気付くことをめあてとした。

めあて 光を当てて試しながら、色や材料の組合せを工夫して、いろいろな種類の「映った光」を見付けよう。

(1)活動1 自由に触れて光の効果を試す活動

最初に材料コーナーの材料を取りに行っている子どもと試す児童が多く見られた。近くの席同士でこの材料はこのように使うと良いなど自然に交流を始める児童や、黙々と一人で光を当てながら試す児童と見られた。多くの児童が次々に表現方法を試し、材料と光の効果との関係を確認していた(図5)。



材料コーナーから思い思いのものを持ってくる。



光に当てて色が映し出されるか確かめる児童。

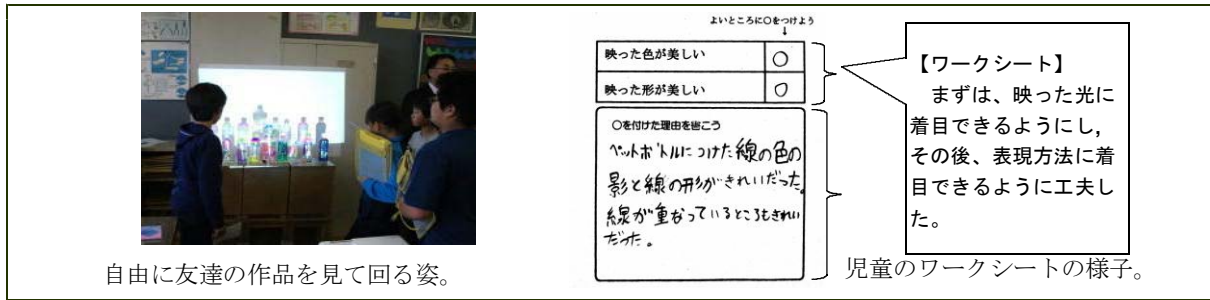


ペットボトルを回転させて映り方の違いを確認している。

図5 活動1の様子

(2)活動2 試して見付けた表現方法を共有し、透過性を生かし様々な表現方法を見付ける活動

自由に歩き回って友達の作品を見る時間を設けたことで、たくさんの作品を鑑賞することができた。そして、友達の作品からよさを見付けワークシートに記入した後、全体で作品のよさを紹介し合った。その中から、自分が気付かなかった工夫の仕方や、活動1でうまくいかなかったことの解決の糸口を見付けることができていた。様々な表現方法に触れたことで、多様な表現ができることに気付けたようである(次頁図6)。



自由に友達の作品を見て回る姿。

図6 活動2で映った光と加工した材料を鑑賞し合う様子とワークシート

(3)活動3 共有したことを基に目的を持って表現する活動

第2時は、第1時での活動を基に光を映す作品づくりを行った。共有したことを参考に新たな工夫を取り入れ、更に意欲的に活動する児童が多く見られた。一つ作品が出来上がると、すぐに次の作品をつくり出していた。また、活動1でうまくいかなかった児童は、活動2で共有したことを生かし、繰り返し取り組んで課題を解決していた(図7)。



図7 活動2で見付けたことを生かして作品づくりをする活動3の様子や作品

第3時は、表した作品の組合せ方や並べ方を工夫して、校庭に光の効果を有効に用いて美しい場を構成することができた(図8)。

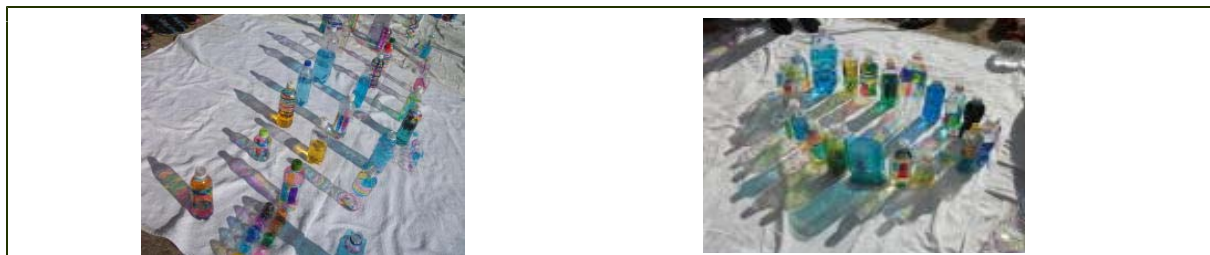


図8 光の効果を生かした場の構成

4 考察

- 授業後のアンケートで「友達の作品を鑑賞したことでやりたいことが広がった、参考になった」と回答した児童は30名(97%)であった。また、活動3では、活動1に比べ「材料の使い方や組合せ方を工夫した」と回答した児童が20名(65%)、「色の塗り方や色の重ね方を工夫した」と回答した児童が26名(84%)であった。新たな工夫を取り入れて活動に取り組めたことが分かった。
- 児童の感想「最初はどのように色を重ねたり塗ったりすればいいのかあまり分からなかったけれど、友達の作品を見たらできるようになった」「うまくいかなかったところを友達の作品を参考にして直したら、光がいろいろな色になって、まっすぐに光るようになった」などから、活動1で活動がうまく進まなかった児童が活動2の共有の中から解決の糸口を見付け、活動3に生かせることが分かる。
- 活動2では、友達の作品からよさを見付けた。一つの作品を選んでよさを記入する形にしたため、選ばれた作品の数が少なくなってしまった。その結果、全体の交流で出された意見も少なくなってしまった。友達の作品からよさを見付ける際には、一つの作品からではなく複数の作品からよさを見付けることが、新たな視点や広がりを生むことに有効であることが明らかとなった。共有の場の持ち方が今後の課題である。